

## 地域経済ウォッチング

いわき民報 2009年10月29日(木曜日)

### 「ショーシャル・インクルージョン」という考え方

#### 貧困が社会的孤立を深めていく

#### 住民主体の福祉活動を！

東日本国際大学 福祉環境学部 准教授 飯村史恵

##### ●事欠かない暗いニュース

昨今の新聞やテレビなどマスコミ報道を見渡せば、業績悪化による企業の倒産、それに伴う解雇やいわゆる派遣切り等の雇用不安、年金等社会保障制度への不信感の増大、介護を苦しめた家族による殺傷事件、介護従事者の人材不足、止まない児童虐待、心の問題を抱える人々の増加、年間3万人を超える自殺者、誰にも看取られることなく死に至る孤独死の存在等々、暗い世相を反映したニュースには事欠かない。アメリカに端を発した金融危機によって国内の経済状況はさらに悪化し、国民一人ひとりの生活に打撃を与え、とりわけ低所得世帯への影響は少なくない。

##### ●もはや平等社会ではない

日本はひところ総中流社会といわれ、所得格差の少ない平等社会とされていたが、今やこのような神話は完全に崩壊に至っている。こうした中で、日本国憲法で謳われた国民の最低限度の生活を保障する生活保護制度の受給世帯は、平成21年7月分の概数でも120万世帯を超えている。

##### ●経済的な困窮だけでなく……

ところで近年の貧困問題の中で注目されるのは、それが単なる経済的な困窮問題に留まらずに、貧困状態に陥った人々が社会的なつながりを喪失し、社会から排除されてしまうという問題である。すなわち今日の貧困は、物質的な豊かさの欠如のみならず、家族や近所づきあい、職場での同僚とのつきあいも失わせ、制度を利用することもできず、社会的に孤立を深めていくという問題であると捉えられる。これらの問題を乗り越え、社会的な連帯によって人々の力を強めていく政策的理念として注目を集めているのが、ヨーロッパを中心として広がりをみせてきた「ソーシャル・インクルージョン」の概念である。

#### ●孤立させずに「包み込む」

「ソーシャル・インクルージョン」は、「社会的包摂」「社会的包含」などと訳されるが、そのままカタカナで使用されることも多い。意味するところは、ホームレス状態に陥った人々を始め、前述した生活困難を有する人々や社会サービスが行き届かない人々などを地域社会から排除し、孤立させるのではなく、社会活動への参加を確保し、社会の一構成員として包み込むこと(inclusion)である。

情報化が進展し、利便性の高い現代の日本では、人々とのつながりなどあろうとなかろうと自分の生活にさして支障はないと考える人々が少なくないのかもしれない。お金さえあれば、いつでもどこでもモノは買える。クリック一つで世界と交信できる。しかしその便利な生活は、一度経済的な余裕が失われてしまえばあっという間に崩壊してしまう。自分とは全く縁がないと思っていたホームレス生活に、まるで「すべり台を滑り落ちるように」陥ってしまうというのが現代社会であるというのである。

#### ●顔の見える関係づくりの実践

その一方で、地域の問題に目を向け、市民の力によって新たなコミュニティを再生しようとする動きが確かに芽生えつつある。一例として、団地内で住民が「孤独死ゼロ作戦」を展開

し、孤独死を防ぐ取り組みを行っている自治会(千葉県松戸市)が挙げられる。この自治会では、「現場から学んで生かす」を基本姿勢に、住民による家庭訪問など顔の見える関係づくりをすることによって「地域力」を高めている。

●おわりに

地域福祉の第一歩は、地域特性を知り、地域の共通課題を認識することから始まるということを考える時、このような新たな動きこそが現代日本の抱えるさまざまな排除の問題を克服し、「ソーシャル・インクルージョン」の考え方を現実に根付いたものにしていく原動力になるのではないかと期待される場所である。